栗野・徒然日記

四帖の四・秋

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、春(三～五月)、夏(六～八月)、秋(九～十一月)、冬(十二～二月)の季節ごとに再編集しました。

栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2024.9.2　路傍の花～その 6～「似た者同士③」

荒れ地にエノコログサが群生していました。これだけ集まると、見事な景観です。夏も終わりに近づくと、キンエノコロが穂を揺らして輝くようになります。ムラサキエノコログサは、6 月から見られます。

普通に見かけるエノコログサは、縄文時代中期以降に、粟栽培と同時期に我が国に入ってきたと言います(粟の原種らしい)。飢饉のときには、食用にしたと言い、食べることができます。

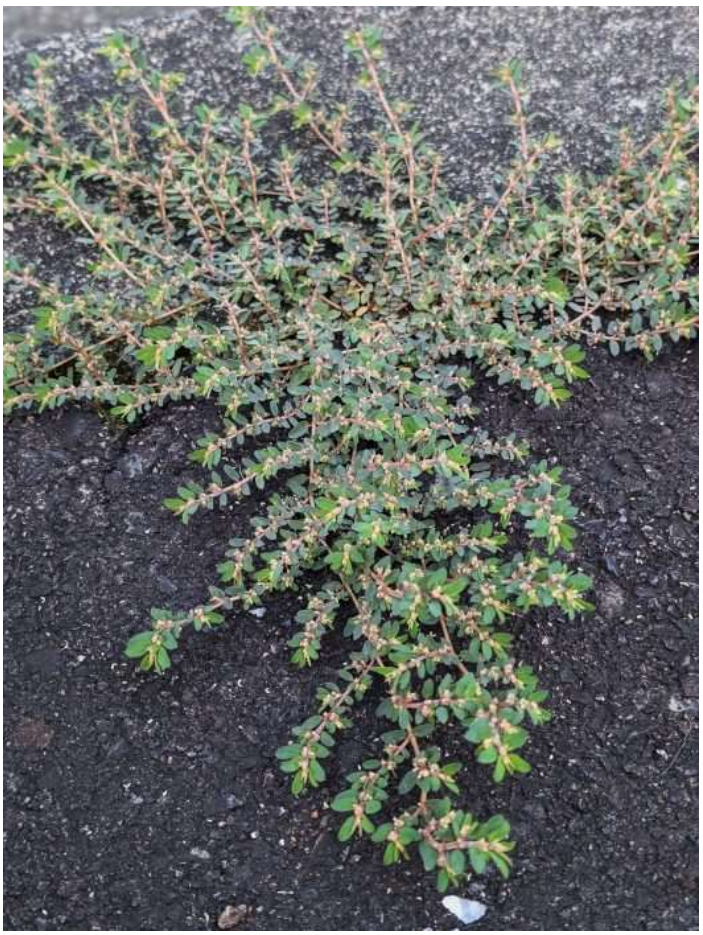
一方、ヨーロッパ原産のキンエノコロそれより古く、渡来したとか(在来種とされることもある)。

長めの穂をつけるアキノエノコログサやオオエノコロもあり、キンエノコロでも長めの穂があるようです。じっくり観察したいものです。

2024.9.4　路傍の花～その 7～「似た者同士④」

道端に、茎をまっすぐ伸ばしたオオニシキソウが花をつけています。しばらく歩いていくと、今度は、ニシキソウがアスファルト面に這って出てきていました。

ニシキソウの近縁種には、葉に斑紋がある外来種のコニシキソウもあって、じっくりと観察する必要があります。



▲ニシキソウが随分と道路に広がっています。

▲葉に斑が入るコニシキソウもすぐ近くに生えていました。

▲特定外来種のアレチウリ。昨年は駆除されていたのに。

▲話は変わりますが、新札がお釣りでもらえました。7 月 3 日に発行されてから、出回るのに 2 カ月かかりました。1 万円と 5 千円札はまだ見かけません。

2024.9.19　茸(キノコ)の季節

雲一つない青空が広がり、今日もぎらぎらと太陽が照り付ける長良公園の芝生広場一面に、小さなキノコが生えていました。調べてみると、コツブヒメヒガサトヨタケという長い名前の小さなキノコらしい。

9 から 10 月にかけては、キノコの季節を迎えます。一方、昨日は 35 度超えの、観測史上最も遅い猛暑日となりました。それでも、今年も、切り株や考えられ芝生など、あちらこちらに見かけます。昔は考えられなかった園芸用土を用いた鉢植えにも、いつの間にか生えています。我が国には 5 千種以上のキノコがあり、まだ特定されていないとも言われます。

キノコの見分けはむつかしいですよね。私にわかるのは、せいぜい松茸、椎茸、エノキ茸、なめ茸にサルノコシカケ程度。そう言えば、子どもの頃、御神木などに生えていた大振りのサルノコシカケ（本当に猿が座れそうな大きさでした）は、いつの間にか見かけなくなりましたね。

▲鉢植えの木から生えてきたのは、カラカサタケらしい。

▲切株にも･･･カワラタケの仲間?

2024.9.20　スズメウリ

　雑草として扱われるスズメウリですが、これまで見かける機会はありませんでした。山陰にひっそりと 1.5cm ほどのツヤツヤした緑の実を吊り下げていました（小さいウリなのでスズメウリ）。小さな白い花共々可愛らしい。華奢なツルを支える細い巻きひげも、必死で近くの草に絡んでいるようでいじらしくさえあります。6 日後、実が増えているかと腰を下ろして見てみると、なんと悲惨な姿に。葉はほとんど食われていました。こんなになっても、実は育つのかな?
　ボールのような実と対面したこの朝、メジャーリーグで、翔平選手が 6 打数 6 安打、3 ホーマー、2 盗塁、10 打点。シーズン 51 ホームラン-51 盗塁を記録。チームは 20-4 と快勝し、ポストシーズンに進出を決定しました。手をたたきながらテレビ観戦。春先の通訳の問題を抱えながら、走り抜けた活躍に、目頭が熱くなりました。

▲次に見た時は、哀しくもこの状態。【9 月 20 日】

▲犯人はこの虫

2024.9.30　秋の気配

日差しには、まだ暑さが残るものの、里の景色は確実に秋に向かっています。
すでに稲刈りが終わった田もありますが、この田は昔ながらのハツシモでしょうか、刈り取りが始まりました。鳥羽川では、ススキが風になびき、風に吹かれ、遅ればせながらヒガンバナも河川敷に見られます。秋の里の風景は、良いものですね。

◀▼機械化が進んだとはいえ、日本の秋の原風景ですね。

▲同上（田んぼの東にある堤防道路を挟んで広がる鳥羽川の景色）

▲同上（シマスズメヒエも雑草ですが、個人的にはこの草のたたずまいが好きです）。

▲まだ稲刈りの始まっていない近くの田の端には、雑草のイヌビエが。

2024.10.21　芋づる

シルバー人材センターは、就業希望の高齢者の登録先という印象が強いけれど、近年では交流活動も盛ん。岐阜市のセンターでは、健康マージャン、ゴルフ、民謡、パソコンなど 13 の会が活動を行っています。その一つに、昨年発足した「保存食等研究部会」があります。1 年の活動成果をまとめたレシピ集「我が家の保存食」がこのほど発刊されました。季節ごとに 36 のレシピと、究極の食品と言われる「忍者の兵糧丸」や「陣中食」のコラムも掲載し、読みごたえがあります。

中でも、乾燥させた芋のつるを使った一品にご注目。佃煮はきゃらぶきのようにおいしい。災害時のためにも、芋づるの活用が、もっと普及していいのではないでしょうか。

今後は、保存食の第 2 弾、第 3 弾のレシピを目指すとともに、郷土食や行事食もまとめていくとしています。

高齢者の社会参加は、閉じこもりを防ぎ、交流することで認知症予防にも効果があるとのデータがあります。公民館のクラブをはじめ、自分に合ったさまざまな活動機会を有効に利用したいものです。

2024.10.28　稲孫(ひつじ)

▲イナゴも狙う･･･棚ぼた?

稲刈りをした後の株から、稲穂が顔をのぞかせています。いわゆる二番穂で、これを稲孫(ひつじ)と呼ぶようです。昔はこれを大切に集めたと言います。稲はもともと多年生植物で、熱帯地方では、収穫量は年々低下するものの、繰り返し収穫することも不可能ではないようです。

現代の日本では、せっかく実らせた二番穂も、田にすき込まれる運命にあります。

衆議院総選挙が昨日行われ、結果が早朝に判明しました。与党が政権交代のあった時以来、初の過半数割れ。裏金問題や統一教会がらみの失政への審判に終始し、結果は大方の予想どおり。

食糧・エネルギーをはじめとする安全保障をはじめ、我が国の近未来にかかわる肝心の政策面を問う機会としては、最初から希薄に過ぎた･･･?!

2024.10.30　ドジャースブルー

10 月 30 日、米大リーグのワールドシリーズを、ドジャースが制覇しました。ポストシーズンも、紙一重の差で勝ち進み、ヤンキースとの決戦でも、第 1 試合では、フリーマンの逆転サヨナラ満塁ホームランで波に乗りました。レギュラーシーズン終盤からは、ヒヤヒヤドキドキのゲームの連続でしたが雲母味方したのでしょう。

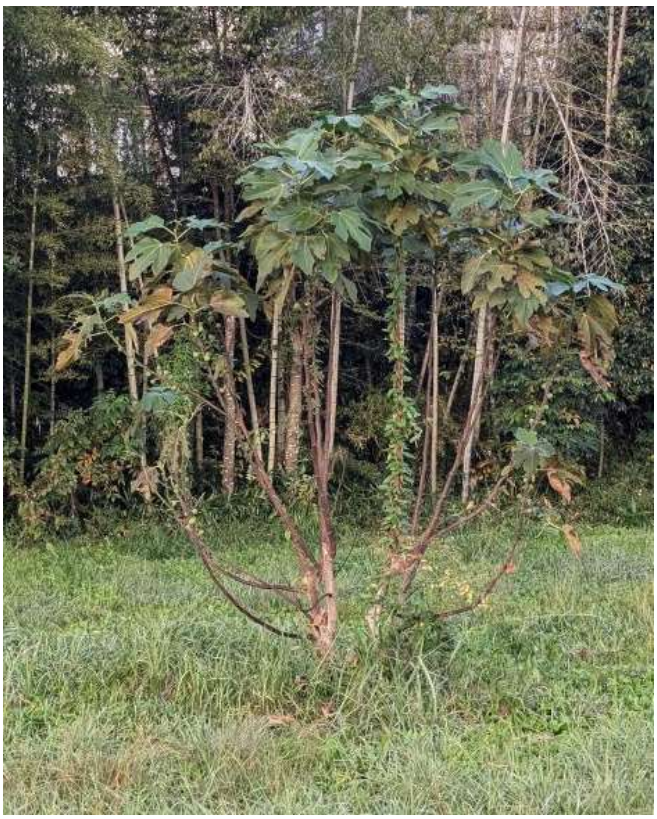
それにしても、大谷翔平がサヨナラ満塁ホームランで 40-40 を達成した場面、そして 6 打数 6 安打 3 ホーマー10 打点 2 盗塁で 50-50-を達成した場面(このゲームでは、本塁打、盗塁数ともに 51-51 まで伸ばしました)では、テレビのライブ映像に、思わずこぶしを突き上げていました。本人にとって激動の 1 年だったに違いありませんが、多くの人々が元気をもらったに違いありません。ヤンキースとの 2 戦で、盗塁時に傷めた左肩の回復を願っています。

▲秋空はドジャースブルー。岩戸公園から見る岐阜城も輝いていました。

2024.11.4　唐柿と無花果(イチジク)

　母方の祖父は、大好物のイチジクのことを唐柿(「とうがき」と呼ぶのが一般的らしいが、彼は「からがき」)と言っていました。イチジクの別名とされますが、イチジクとカラガキは種類が違うようです。1600 年代、ポルトガル人によって中国からもたらされた「蓬莱柿」(ほうらいし)を、唐柿としてアメリカ原産のイチジクと区別しているみたいです(現在は、国内の大半がアメリカから輸入されたドーフィン種)。
農協の直売店で、ドーフィン種のほか、唐柿も 3 パック並んでいたので、両方買い求めました。実がやや小粒で、甘さが際立っているのが唐柿らしいのですが、むしろ酸っぱい。お尻が、しぼんでいたことから完熟してなかったことも一因? 干しても甘くならないので、ワイン煮にしてみました。これなら生のイチジクが美味しい。
　散歩していると、ポツンとイチジクの木。よく見ると、枝ぶりも葉の形も、イチジクとは異なるイメージ。これぞ唐柿!!　今まで気づきませんでした。

▲唐柿をカットするとこんなに赤い。ドライフルーツを試みますが、甘みは増しませんでした。
▶仕方なく、ワイン煮にしました。



▲自宅近くに生えていた唐柿(葉や枝ぶりなどから多分古くからの日本イチジク)。

2024.11.12　夏日?･･･暦の上では立冬は過ぎたのに

7日は立冬でしたが、まだ日差しは強く、暑い日が続いています。秋が深まるとよく見かける白色の蛾かと思いきや、ウラギンシジミチョウ。初対面です。黄色く色づきかけた葉の裏に羽を休めていました。

鳥羽川にダイサギが獲物を狙って、水面を見つめています。と、すぐに獲物にありついたようです。

バラのとげを利用して、モズの早贄(はやにえ)。アマガエルは時折見かけますが、トカゲは初めてです。

遅ればせながら秋らしい、過ごしやすい一日ですが、生き物には厳しい季節を迎えつつあります。

▲狙いを定めて。

▲狙いを定めて。

▲捕らえました。

▲モズの早贄(はやにえ)･･･自然界の厳しさを感じます。

2024.11.11　石蕗(ツワブキ)好きの面々

見頃を迎えた石蕗に虫たちが次々と訪れています。こじんまりとした草株の花に、これほど沢山の種類の虫たちが訪れる光景は、あまり見かけません。この時期にしては珍しい 20 度を超える日差しを受けて、黄花が輝く時間帯に限りますが、一斉にホソヒラタアブ(トップ写真)、キチョウ、イチモンジセセリ、オオハナバチ、ツマグロキンバエ、クロバエなどがやってきます。この季節、黄色の花は目立つからでしょうか。

ところで、ふきを調理したきゃらぶきはおいしいですよね。それが、花と葉を鑑賞する石蕗でも出来上がります。繁茂した春から初夏頃の葉柄を摘んで、ぜひ試してみてください。本当においしいですよ。

▶オオハナバチ

▲キチョウ

▲イチモンジセセリ

▲ツマグロキンバエ

▲クロバエと右下の花びらにも小さな虫が･･･見えますか?

▲小さなハナバエの仲間

▲ツワブキの煮物。葉柄は、普通のふきと同じように食べられます。

2024.11.23　深まる秋

　ファミリーパークの木々も、このところの寒さで遅ればせながら色づいてきました。粟野の山裾のハゼも早いものは落葉し始めました。

　13 日、詩人の谷川俊太郎氏が、老衰で逝去。92 歳。哲学者の父親譲りと伺える作品もありますが、鉄腕アトムの主題歌のような親しみやすい作品も残しました。ムーミンに登場する哲学者のジャコウネズミではなく、スナフキンに重なると言ったら稚拙な例えではありますが、やはり詩人なのです。詩集定義に収められた疑似解剖学的な自画像の末尾の一節に、私はいつか焼却炉で焼かれるだろう。一個の甲状軟骨を残して。

▲真っ赤に色づいたハゼ。漆の仲間でかぶれるのでご注意。

▲縁から色づき始めたハゼの葉も。

▲サルトリイバラの実は真っ赤に色づきました。

▲むかごを付けたヤマノイモも黄葉。

▲詩集 1975 年 9 月 20 日初版、翌 2 月 10 日 2 刷 880 円　73 ページにしては高価。自由書房 2 階で偶然手にした一冊。

▲直筆のサインが味わい深い。

2024.11.25　初霜

放射冷却も相まって、初霜。エッ、という感じでした。触れて溶けるのを確かめる。吐く息も、なるほど…白い。

それでもまだ、草花は元気。鳥羽川の堤にフジバカマが咲いている。野生で見たのは、もう 20 年ほど前。長良川の藍川橋南詰め河畔。それが最初で最後。出会った花は、近隣の人が植えたのではなかろうか。

バラのトゲにモズのハヤニエ。先日はトカゲだったが、今回はヘビ。アマガエルを見かけることはあったが、今年は爬虫類が続いた。これも気候変動のせい?

◀▲堤防に、フジバカマが元気に咲いていました。

▲ハヤニエの 20cm ほどのヘビ。
頭部は食べられた?　ゾ～ッ!!

これ以降の日記は、現在編集中です。